

## ジッドのアンリ・マシス宛未刊書簡をめぐって

吉井, 亮雄  
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1495155>

---

出版情報 : Stella. 33, pp.315-328, 2014-12-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# ジッドのアンリ・マシス宛未刊書簡をめぐって

吉 井 亮 雄

周知のように、芸術的な領域にとどまらず宗教・倫理・思想・政治について、自身が抱えるさまざまな苦悩に端を発した問題提起を続け、しかもしばしば前言訂正をためらうことのなかったジッドの姿勢は、熱烈な賛同者を獲得すると同時に、それにも倍する多くの批判者を生むこととなった。カトリック教会の権威を揶揄し、あまつさえ同性愛を暗示する一場面を盛り込んだ『法王庁の抜け穴』(1914年)以後はとりわけ、宗教界や文壇の保守主義層から良俗の紊乱者と見なされ、厳しい非難に晒されることになる。代表的な論敵としてはポール・クロードルやフランシス・ジャムら何人かのカトリック作家のほかに、1921年から翌々年にかけて、ジッドばかりか彼の率いた『新フランス評論』グループを語気するどく誹議したアンリ・ペロー<sup>1)</sup>、第1次大戦の直前から反ジッド・キャンペーンを展開し、作家の最晩年まで攻撃の手を緩めなかったアンリ・マシスのふたりが特によく知られている。

本稿では、最後に名を挙げたマシスに宛ててジッドが綴った未刊書簡(1924年1月)を関連資料とともに訳出・提示したい。なおタイトルに謳うように眼目はあくまで当該書簡の紹介であり、およそ30年にわたる両者の関係を総体的に考察することではない。したがって1920年代後半以降の具体的経緯は論述の対象から外す。この点をあらかじめ承知されたい。

\*

アンリ・マシスは1886年にパリで誕生(ジッドより17歳年少)。大戦前の不安な青年たちの多くがそうであったように、科学主義への疑念に根ざす精神的探求に深く動機づけられた思春期を送った。名門コンドルセ高等中学でアランの薫陶を受けたが、この合理主義哲学者は早くも教え子のうちに教条主義的

な心性を見てとっている。同校卒業後はソルボンヌに進学し、1908年に哲学士号を取得。その間<sup>かん</sup>ファスケル社から上梓した処女評論『エミール・ゾラは如何にしてその小説群を書いたか』(1906年)がエミール・ファゲの目にとまり、若くして批評家としての将来を嘱望された。アランを経てのち、マシスの思想的関心は主としてモーリス・バレスとベルクソンへと向かう。前者にたいしては後々まで忠実な信奉者であったが、ただし後者にかんしては、当初はその「持続」の概念に惹かれたものの、後年、自身のカトリシズム回心にともない結局は遠ざかることとなる。政治的にはバレスへの傾倒と連動して、シャルル・モーラスおよび「アクション・フランセーズ」の影響を強く受け続けた。

マシスも学んだソルボンヌは新世紀初頭から教育体制の大規模で組織的な改革を続けていたが、これにたいする一般の批判はさほど盛り上がりを見せていたわけではない。だが1910年を境に事態は大きく動き、「新ソルボンヌ」は広汎な議論の対象となる。わけでもアガトンなる新進評論家が激しい批判をくり広げたが、このアガトンこそはマシスがアルフレッド・ド・タルドとの共作にさいしもちいた筆名だった。両人は週刊紙『ロピニオン』の連載論文でパリ大学文学部の新たな教育方針を、ドイツの影響下、歴史的調査や伝記的・書誌的研究で事足りるとし、フランス的な価値を支えてきた直感や審美眼を蔑ろにするものだと厳しく難じたのである。翌年1月、彼らの批判論文を纏めた『新ソルボンヌの精神』がメルキュール・ド・フランスから出版されると、大戦の予兆に敏感な知識人たちの関心・危機意識は大きく高まる。『新フランス評論』もこの機を逃さず、同書にかんする論評を文壇デビュー後間もないアルベール・チボーデに依頼した。ジッドはその意図を3月27日のジャン・シュランベルジェ宛書状のなかで簡潔に記している——「チボーデの関心を煽るため彼に一言書き送ります。というのは第一に、アガトンの本は私には重要なものと思われるから。また第二に、[...]アガトンその人自身も『新フランス評論』にとって素晴らしい新規寄稿者になりうるであろうから」<sup>2)</sup>。文面からもジッドがこの時点で熱き論争家マシスの素性を承知していたとは考えにくい。将来の敵対者にたいする好意的な評価は、意外であるだけになんとも興味深い。

しかしながら、マシスが『新フランス評論』に寄稿・協力する機会は結局のところ訪れなかった(タルドのほうは翌1912年、同誌に2度だけ書評を寄せる)。それどころか『法王庁の抜け穴』が同誌連載後単行出版されると(1914

年5月), 早速マシスは翌月22日付の『レクレール』誌に長い署名論文を載せ、「悪は構成コンボゼせず」というクローデルの言葉を引きながら、ジッドには小説創造の能力が著しく欠けており、またその倫理観と美意識とは破滅的に乖離していると、厳しく非難したのである<sup>3)</sup>。『「抜け穴」について警鐘トクサンを乱打<sup>4)</sup>』したことで早くも彼は『新フランス評論』グループから警戒されはじめる。当のジッドが不満・反感を抱いたことは、アンドレ・リュイテルスら友人に宛てた書簡からも明らかだが<sup>5)</sup>、また同時に彼に特有の反応として、この一件をある意味では歓迎すべきものとも捉えている。マシス論文を読んだ当日(7月12日)の「日記」——「私はそこに大きな利を見出した。なぜなら、彼が私に向ける非難がたとえ誤りであっても、少なくともそれを挑発・惹起するように振る舞ったのは私だと認めるべきだから。結局のところ、彼や他の連中が私を難じるのは、自分たちが最初の判断で私のことを見誤ったからなのだ<sup>6)</sup>……。なお、当時ジッドが批評家本人に直接反駁したか否かは未詳である(1924年1月の後掲書簡以前には両者の文通関係は確認されていない)。

しかしマシスの攻撃が真に激しさを増すのは大戦終結後のことである。たとえば『ラ・ルヴェ・ユニヴェルセル』(彼とジャック・バンヴィルが、ジャック・マリタンら他のモーラス主義者を糾合して1920年に創刊。月2回発行)の1921年11月15日号に発表した「アンドレ・ジッドの影響」では、ジッド独自の概念「誠実サンセリテ」を逆手にとって次のように批判している——

ではジッドにとって「誠実」とはいったい何なのか。誠実とは、あらゆる想念を保持することであり、「我々のなかに存在するものはどれも延滞すべきではない」のだから、自己のなかに存在するというただその一事によってすべての想念に生存権を与えることなのだ。そして自分自身のどんな要素をも見捨てたくないために、ジッドはその美学を不健康きわまりない靈感に従属させてしまうのである。[……]「卑俗かつ粗野で、病熱を帯びた、清掃されていない領域」は芸術家に「えも言われぬ資源」を提供してくれるが、これにたいし「高尚な領域は内容が貧弱である」と彼は断言する。[……] アンドレ・ジッド氏は貧弱になるのが恐くて真理を拒絶する者たちのひとりなのだ。彼は、真実はひとつだが虚偽は無数にあるのだから、真実よりも虚偽のほうが豊かだと思ひこんでいる。悪にたいする彼の偏愛はここに由来するのだ。<sup>7)</sup>

あるいは、またしてもクローデルの格言を引いた次のごとき附註の一節——

ジッドは〔時として優れたその美学的〕考察を人間的な次元にまで広げようとはし

ない。それとはまったく逆に、彼は倫理を美学に従属させてしまうのだ。福音書の一節「自分の命を救いたいと思う者はそれを失うが、命を失う者はそれを得る」を引くとき、この新教徒は〔引用の文言を〕芸術に当てはめようとする。ジツドの美学的誤謬はなによりもまず倫理的な誤謬なのだ。私が思い浮かべるのは、「悪は構成せず」という、教えと真実に満ちたポール・クローデルの言葉である。この言葉こそがジツドの敗北、彼の芸術の敗北をもの見事に説き明かしている。<sup>8)</sup>

さらに決定打とも言えるのが、1923年6月出版の『ドストエフスキー』を標的とした長大な論文である（『ラ・ルヴュ・ユニヴェルセル』11月1日号および15日号）<sup>9)</sup>。ジツドの新著は主として、1908年発表の「書簡集から見たドストエフスキー」と、この1923年1-2月にヴィュー・コロンビエ座でおこなった連続講演を纏めたものだが、マシスはロシアの文豪を絶讃するその論述を執拗に攻撃する。時に敬称をもちいながらも、語調は冒頭から厳しい――

不安を抱かせるドストエフスキーの人物像を模範としつつ、アンドレ・ジツド氏が努めてきたのは唯ひとつ、そこに己の似姿を追い求めること、そしてロシア人大作家が描く主人公たちの切迫した現実を利用して、いっそう巧みに自分の顔を隠すことである。そういう行いが多くの若者に「無遠慮な支配力」を及ぼすと分かるうちは、彼はまさにこれを手に入れ、自分の影響を拡大したいと望むのだ。

ではまずは、なにゆえにドストエフスキーなのか。己の秘密に合致する教えをそこに見出すためであり、己の心のさらに深い領域を読みとり、己自身の思考と類似したものをそこに見出すためである。というのも、アンドレ・ジツドは自分に無意味なことは何ひとつ挑むことができないからだ。彼の思考・行動において、これほど動機のはっきりしたことはない。自己を超越することなどは決してないのだ。実際には、世界各国の文学に「蜜」を探し求めてきたこの作家のものほど、驚きと抱擁を欠く作品はほとんどない。彼が到達するのは間断なき自己評価でしかないのである。〔…〕<sup>10)</sup>

またマシスにとって、現代における「古典主義の代表者」を自認するがごときジツドの態度はとうてい容認しがたいものであった――

我々の言語、我々の特質、美にたいする我々の古典的規範、すべては語らざにおくこの技芸、その「節度」、恥じらい、倫理的美質、ジツドはこういったものを無しですませようとする。そしてたとえ彼がこれらを賛美する場合でも、その賛美は生や理性、叡智、精神の偉大さ、またこれら感知しうる発露の源にある聖性などの概念を破壊するためのものでしかないのだ。<sup>11)</sup>

翌1924年の初頭には、ブロン＝ヌリ社からマシスの評論集『審判』の第2巻

が出版される。同書はロマン・ロランやジョルジュ・デュアメル、ジュリアン・バンダらを論じた章も含むが、全体の4割近くを占めたのが、これまでに紙誌掲載されたジッド批判であった。ジッドは同書が刊出するや直ちにこれを入手したばかりか、マルタン・デュ・ガール、エルンスト・クルチウスなど数名の友人・知己に（おそらくは版元を通じて）送っている<sup>12)</sup>。またマシスの非難・攻撃が文壇内外の耳目を集めるのを見越していたのだろう、ピエール・ド・マッソらから提供を受けたり、ある時点からは情報収集の専門業者に依頼して彼が集めた新聞・雑誌の関連記事は16点に上る（これら「マシスの攻撃」にかんする切り抜きは現在パリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫が保管<sup>13)</sup>）。

マシス本人へのジッドの対応としては、後掲の1月25日付書簡がよく知られている。同書簡は『全集』第12巻（1937年刊）に全文が収録されたもので、そのことから作家自身が後々まで重要な記録と見なしていたことが分かるが、じつはこれに数日先立ち、別のマシス宛が準備されていたのである。筆者がこのたび新たに存在を確認した当該書簡（個人蔵）を若干の補説とともに訳出・紹介することにしよう。

まずその物質的側面から述べると、資料体は縦27×横21センチの薄手の用箋5葉よりなるが、黒インクをもちいた記述は2つの部分に分かれる。ひとつは用箋を縦長に置き、5葉すべての片面と、第5葉の反対面4分の1にわたり切れ目なく綴られており、随所に削除・訂正が認められる。内容から見ても明らかに未完結で終わった下書きである。もうひとつは、上記テキストに比べればはるかに短く（記述量は12行）、第1葉の反対面に記されているが、実際に文字列が並ぶのは用箋を二つ折りにした左の面だけ（折り目は記述の右側）。署名はないが、「マシス様」と始まり、結句を備えたテキストである（文中に一箇所だけ語句の訂正あり）。これが書簡の下書きか、あるいは写しであるかは判断が難しいが、訂正の存在から見ておそらくは前者であろう。

2つのテキストの執筆順は、以下に述べる用箋の使用法から容易に確定する。すなわち、白紙用箋を二つ折りにして使用する場合、折り目を左側にして、まずは表面の右半分から文字を綴り、次いで内側の右半分へと続けてゆくのがジッドの書き方の常なのである（さらに紙片を改めず記述を続けるさいは、用箋を上下逆転ないし90度回転させた状態で残りの面をもちいる）。このことから判断するに、最初に書かれたのは首尾の整った短い文章ではなく、結語に至

らず中断された長い下書きのほうであるのは疑えない。また投函・発信の有無については、原物が確認されていない以上、即断は慎むべきだが、1月25日付後掲書簡での献本受領の文言や、若干の内容重複を含んで長々と展開される弁明・反論を考慮に入れるならば、献本を請うた短信のほうが送られ、長文のほうは未完結のまま終わり、上記書簡にとって代わられたというのが最も無理のない推論であろう。

以上を簡略な補説として、早速2つの未刊資料を提示しよう（なお、削除箇所は大半が文体上の選択の結果にすぎないので、ここでは読み易さを優先し取って訳出しない）。まずは長い下書きから――

〔パリ、1924年1月20日頃〕マシス〔宛て〕

ご指摘のなかには、私が見てもまったく正論だと思うものがある。それを私にたいする攻撃の武器となさるのは貴方の自由です。しかしまた、貴方が私を責めるために濫用し、――私の考えを意図的に歪曲しているだけに――私の反論を誘うご指摘もあります。すでに申しあげたように、そして貴方も十分ご承知のように、『背徳者』や『狭き門』『イザベル』『田園交響楽』など、私の「レシ」は厳密に言えば批判の書なのです。〔しかるに〕これらの物語が1人称体で書かれたことを理由に、貴方は語り手の「私」はこの私自身だ、そう信じ込んでいるふりをなさる。とすれば後は、私の無節操や不安、優柔不断を、さらにはお望みのものは何であれ、証立てるのは容易いこと。わけても、けっして私は己の存在から離れることができなかつた、と難なく言いきつてしまえるわけです。

フローバール流の客観性では私は満足できなかった、そう仰るならば、ご指摘はもっとと真実味を増すことでしょう。かかる客観性は人間存在を外面からしか眺めようとせず、存在の深奥に到達することはありません。私の思うに、小説家にとって真の客観性は別様な働き方をするものなのです。小説家が登場人物になりきれないかぎり、描かれるのはその輪郭にしかすぎません。このようにはお考えにならないでしょうか。すなわち、アリサや背徳者〔ミシェル〕、『田園交響楽』の牧師、『イザベル』の主人公など、各々きわめて異なる存在に次々となりえたからこそ、私は貴方やほかの多くの人々を騙せおおせたのだ（とうぜん貴方がたにはもっと知性と洞察力を働かせていただけのもの期待してはいたのですが）、と。そうです、まさに私はひとりの登場人物として、己の姿を消し自分自身を忘れ去るのです。とはいえ、彼らにたいする判断力を失うほどではありません。こうして私の作品（『地の糧』をのぞく）は、いずれもが「批判」の書となっているのです。貴方に代わって他の人々のなかには、背徳者やある種の神秘主義、現実離れた「想像力」、また結局はカトリシズムの賛美へといたる宗教的熱意、こういったものにたいする批判であることを完全に理解してくれる者がいました。しかし貴方といえ私の作品のうちに、ご自身の主張や偏った判断に適うも



のしか認めようとなさらないのです。

無秩序がただ混乱にしか至らぬことは貴方もご承知のところ。また私の著作のいずれもが、その形じたいにおいて無秩序を否定するものであるのをよくご存じです。私が求める秩序は、貴方の称揚する秩序と同じものにはあらず。ただそれだけのことなのです。

もう少しうまく自分の考えをお伝えするために、次のような話をするをお許しください。戦争が勃発したとき、私は田舎にいましたが、その場で物を書き続けていればいいのだなどは到底思いませんでした。招集はされずとも、国に尽くしたいと願い、自分の思想を役立てることもできないので、私は何人かの者たちとともに、様々な場所から逃れてきた避難民の救援活動を指揮することに没頭したのです。いたるところ大変な無秩序状態でした（無秩序ほど私の精神に堪えるものはないというのに）。しかしながら私は、実業家や財界人、代訴人、また履歴の異なる3人の同業者らに囲まれ、彼らが設立後はひたすら私に委ねようとした組織をまったく訳も分からぬままに引き受けることになったのです。最初の数カ月はそんな具合でした。しかしその後、活動を続けるうちに、採用した会計システムによって巨額の出費さえ可能となり、またまさにその支出が大きな収益をもたらさうようになったのです。貴方なら無秩序状態のなかでの急な進路変更と呼ぶであろうことを私は実行したのです。つまりまったく異なる会計システムを案出したというわけです。この方法を周りに理解させるのは一苦勞で、しばらくのあいだ私はたった独りで行動しなければなりません。初めは誰からも反対されましたが、私は考えを曲げませんでした。しかしその後の結果は見事なもので、当初は非難していた者たちも最後には私の方法、「固定システム」と呼ばれるこの方法を採用入れ、そのおかげで我々の救援組織は戦時中ずっと活動を続けることができたのです。

全体の主張は明快だが、ベルギー避難民の救援活動<sup>フォワイエ・フランコ＝ベルジュ</sup>「仏白の家」を引き合いに出して自身の「秩序」尊重を強調する最後の段落は、「もう少しうまく自分の考えを伝えるため」という前置きにもかかわらず、どこか唐突にして冗長の感否めまい。執筆中断の理由もあるいはそのあたりにあるのかも知れない。

続いて書かれたのが、語調ははるかに柔らかく、とりあえずはマシスの反応を探ろうといった趣の短信である。ジッドは、紙誌掲載論文や『審判』第2巻そのものにはすでに目を通してはいても、まずは著者自身からの献本を待って対話を始めることを望んだのであろう――

[パリ、1924年1月20日頃]

親愛なるマシス

私にたいする批判論文をお書きにはなられたが、そのことで私を恨んではおられぬと考えてもよろしいでしょうか。ご高論には、その断固たる明晰さを通して、貴方の



無理解とともに、ご理解と愛をも多々感じております。私へのご新著惠投がしかるべきこととお思いにはならないでしょうか。私のほうではすでに4人の方々にご高著を送っています。ご惠投を心待ちにしつつ、敬具

[アンドレ・ジッド]

マシスから献本が届くのにさほど日数を要したとは思えない。自筆献辞が入ったに相違ない『審判』第2巻を手にし、ただちにジッドが認めたのが先に言及した『全集』収録の書簡である（ちなみに、その書き出しを読むかぎり献本に私信が添えられていた蓋然性は低い）。同書簡では、上掲の長い下書きとはかなり語り口を変え、修辞も豊かに、論敵の主張にある程度理解を示しながら自説を展開している。この種の書き直しはジッドの論争的书簡にしばしば見られるもので、一度は感情を表出させた文章を綴ることで、結果的に冷静な視点、いうならば「作家的意識」を回復するのである<sup>14)</sup>。その具体的様態を確認するためにも、すでに活字化された資料ではあるが、全文を訳出しよう<sup>15)</sup>——

[パリ] 1924年1月25日

親愛なるマシス

ようやくご高著を拝受、お礼申しあげます。嗚呼、貴方を悩ますものが何かよく分かりました。私のことを、おそらくご自分以上にキリスト者であり、古典主義者だと感じておられるのです。

クローデルのなんと見事な言葉を引いておられることか！——「悪は構成せず」。今日の作品で、出版後20年経って当初よりなお瑞々しいと貴方が思える作品のなんとわずかなことでしょう。クローデルの言葉は、まさに私の作品を活かし永らえさせるこの資質に貴方の目を開かせるものであったはずなのです。しかし貴方はご高著のなかで、私を理解する（私を認める、とはけって申しあげません）よりは、私を圧殺することに心を砕いておられる。私の文章のいくつかは、貴方によってあまりに偏った光を当てられ、おぞましい意味を帯びてしまう。私自身が述べたものでもないのに、貴方はどんな些細な言葉にも括弧を付して、それを私の発言にしてしまう\*<sup>1)</sup>。拙稿『新しき糧』のうちの2頁について、2頁目の意味を歪めるようなやり方で論じておられます<sup>16)</sup>。というのも貴方は、この頁がご自分の立論の支障となりかねぬことをよく分かっておられるからです。嗚呼、じつに巧みに私を捌き料理しておられるのです。イアーゴーでさえこれほど上手くムーア人〔オセロ〕にデスデモーナのハンカチを示して見せることはない。またイアーゴーの証言がかくも不実なのは、それが〔まったくの虚言ではなく〕大方において正確であるがゆえにほかなりません。『法王庁の抜け穴』にかんする貴方の詭弁は本当に驚くほど見事です。私が作者でなければ、貴方の意見を信じ込んでしまうことでしょう！ また貴方はどれほど私の友人たちをつかまえ、彼らのうえにご自分の良心の重荷を降ろされていることか！……こういったこと

から私は〔ジャック・〕マリタンにたいし述べていた次のような思いをさらに強くしてしまふのです。カトリック信仰のせいで、真実への愛をほとんど必要とせぬ人々のなんと多いことか、と！

私の思うに、マシスよ、細心さがい少しあれば（というのも、私は貴方の知性を難じてはおりませんし、貴方が過ちをおかすさいにはご自分でもそのことを完全に分かっておいでだと思いますので）、真のキリスト者、古典主義者をつくるあの深い資質、あの徳といったものがい少しあれば、貴方の誹謗文書はもっと良質なものになったでしょう。また20年も経たぬうちに、真実の再生に寄与せず剥げ落ちてしまう、そんな懼れも減ったことでしょう。と申すのも、次の点で貴方の攻撃は正当なものだったからです——「ここで非難されているのは、我々が生きる基盤としている《人間》の概念そのものなのだ。（貴方のこの文を私の次作の章題のひとつとして引くことをお許し願いたい）<sup>17)</sup>。

それでもご高著が、私にかんする著作のなかで最も興味深いもの、また場合によっては最も慧眼なものであることに変わりはありません。私のばらばらな像がそこで初めて結合されています。貴方のおかげで、そして貴方の研究を読んでからというもの、私は自分が存在していることをはっきりと感じるのです。

私に不当な評価をお下しになったとはいえ、そのことであまり私をお恨みなさりませぬように。敬具

〔アンドレ・ジッド〕

\*）とりわけ次の偽りの言明は何なのでしょう——「ジッドが望むのはただひとつ、《人が自己満足のためだけに、万に備え己の内奥を晒け出す》ようにしむけることである」。いったいどこから引いてこられたのでしょうか。私は一度としてこんなことを考えたことはありませんが<sup>18)</sup>……。

こうして己の主張を詳しく書き送ったものの、ジッドは2日後（1月27日）、ドロシー・ビュシー夫人に宛て、「昨日マシスに手紙を書きました。写しを取りましたが、この手紙は出さないほうが好かったと思います」と悔いを伝えている<sup>19)</sup>。いっぽう受信者からはまもなく「きわめて長い返事」が届く（28日付）。原文テキストは後掲の結句以外は活字化されていないが、ジッド生誕百周年記念展（フランス国立図書館）のカタログが要約するところによれば、「またもや『ドストエフスキー』について、クローデルの《悪は構成せず》を引きながらの攻撃」であった<sup>20)</sup>。これにたいしジッドは、前便の発送を悔やんでいたにもかかわらず、ただちに再度の反論を準備。しかし最終的にはその発送を思いとどまるのである。30日付マルタン・デュ・ガール宛の記述——「マシスからきわめて長い返事を受け取りました。最後は次のように結ばれています。《貴方を説

得たいと強く望んでおりますが、無理なのではないかと懼れます。〔しかし〕期待を捨てず、貴方のアンリ・マシスより、と敢えて申しあげます。——昨日は一日かけて再び彼に宛てた手紙を書きましたが、熟慮のうえ送りませんでした<sup>21)</sup>。一方では頑な論敵に己の態度選択を理解させたいという欲求、他方ではそれも所詮は無駄なことだという不満と諦念——この10日間ほどの書簡執筆からは、2つの思いのあいだを揺れ動くジッドの心理的葛藤が如実に見てとれる。

マシスの攻撃はジッドだけにとどまらず、次第に『新フランス評論』へも向けられてゆく。同誌も事ここにいたってグループとしての反論を掲載する方針をかため、まず4月1日号に新進作家フランソワ・ド・ルー（以後1934年まで同誌に寄稿）による『審判』第2巻の否定的書評を、次いで10月1日号には1919年から編集長を務めるジャック・リヴィエールの公開状を掲載し、マシスの姿勢を独善的と批判している<sup>22)</sup>。

しかしながら以後もマシスの反ジッド・キャンペーンが止むことはない。「悪魔的な」影響や、似非古典主義の腐敗した芸術、ドストエフキー的な無意識の領域への歪んだ嗜好……。むろん『新フランス評論』の領袖がこのような誹謗を容認することなどありえず、批評家が「ジッドの破産」<sup>23)</sup>の最大論拠として繰り返し援用してきたクローデルの格言についても、1937年6月の「日記」で、これを意味不明あるいは内容空疎と見なすに至る——

「悪は構成せず」というあのクローデルの言葉をマシスに一度ははっきりと説明してもらいたいものだ。マシスはこの言葉に感心して、私について語るとき再々引用している。私はこの文句をあらゆる方向から検討してみたが、結局胸にストンと落ちてこない。今もこの「構成する」という語をどう解したらいいのか分からないのだ。おそらくこれは何も意味していないのだろう。ただいかにも深長な意味があるように見せかけているだけだ。そして人はこうした仰々しい言葉の前で茫然となっているのだ。私はそこに私の作品にたいする有罪宣告を見なければならぬらしい。おそらくこれがマシスのいう「審判」というものなのだろう。<sup>24)</sup>

結局のところ両者の主張はなんら噛み合うことがなかった<sup>25)</sup>。しかしながら頻繁にはないものの、ジッドが1924年以降もマシスに反論の手紙を送り続けたのはなぜなのか。これについてはクロード・マルタンの評言を借りて答えよう——「ジッドにとって〔…〕文通を続けるということは、すなわち一つひと

つ別個の道を辿ること、個々の〔相手〕とともに、個々の〔相手〕のおかげで、それぞれあるひとつの方向にむかって進むことである」<sup>26)</sup>。必然的に良き文通者たるか否かは、当事者間の相違の大小に掛かる場合が多い。相手の感じ方、考え方が自分と異なれば異なるほど好んで接触を試みる、そしてその相手から不意を突かれ、自分の思想や芸術がもつ本当の広がりを見出す、これこそがジッドの望むところだったのである。『全集』収載の前掲書簡のなかで彼は論敵に告げていた——「〔ご高著のなかで〕私のばらばらな像が初めて結合されています。貴方のおかげで、そして貴方の研究を読んでからというもの、私は自分が存在していることをはっきりと感じるのです」。この文言も決してその場しのぎの外交辞令などではなく、他者との差異のなかで自己を確認したいという欲求の顕れと解すべきであろう。

## 註

- 1) しかしながらペローの場合、早くも「1924年には〔…〕息が切れてしまい、『新フランス評論』の《物憂げな顔の十字軍》〔ジッドら同誌の主要作家たちを揶揄したペロー著書のタイトル〕にたいするその抵抗キャンペーンは失敗に終わる」(Claude MARTIN, *Gide*, Paris: Éd. du Seuil, nouvelle éd., 1995, p. 153; 拙訳『アンドレ・ジッド』, 九州大学出版会, 2003年, 159頁)。
- 2) André GIDE - Jean SCHLUMBERGER, *Correspondance 1901-1950*. Édition établie, présentée et annotée par Pascal MERCIER et Peter FAWCETT, Paris: Gallimard, 1993, p. 365. 予想に反してチボーデが示した『新ソルボンヌの精神』にたいする厳しい批判的態度や、それとの均衡をとるために、ジッドら『新フランス評論』編集陣がミシェル・アルノー（ジッドの義弟マルセル・ドルーアンの筆名）によるアガトン擁護の一文を併載したことなど、この書簡の前後の具体的経緯については次の拙稿を参照されたい——「ジッドとチボーデ」, 『ステラ』第29号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 2010年12月, 12-15頁。
- 3) Voir Henri MASSIS, [compte rendu des *Caves du Vatican*], *L'Éclair*, 22 juin 1914, p. 2.
- 4) ジッド自身が7月12日の「日記」および同月17日付ジャック・コポー宛書簡で用いた表現。Voir André GIDE, *Journal I, 1887-1925*. Édition établie, présentée et annotée par Éric MARTY, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p. 807; André GIDE - Jacques COPEAU, *Correspondance 1902-1949*. Édition établie et annotée par Jean CLAUDE, Paris: Gallimard, «Cahiers André Gide»

- 12-13, 2 vol., 1987-88, t. II, p. 62.
- 5) Voir André GIDE - André RUYTERS, *Correspondance (1895-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Claude MARTIN et Victor MARTIN-SCHMETS, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 2 vol., 1990, t. II, pp. 130-131 (18 juillet).
  - 6) *Journal I, 1887-1925, op. cit.*, p. 807.
  - 7) Henri MASSIS, «L'Influence d'André Gide» [compte rendu de *Morceaux choisis*], *La Revue universelle*, 15 novembre 1921, pp. 502-503 ; repris in *Jugements II*, Paris : Plon-Nourrit et Cie, 1924, pp. 13-14, et *André Gide*, Paris : Lardanchet, 1948, pp. 72-73.
  - 8) *Ibid.*, p. 509, n. 28 ; repris in *Jugements II*, p. 19, n. 1, et *André Gide*, p. 263, n. 164.
  - 9) ドロシー・ビュシー夫人（後に多くのジッド作品を英語訳）に宛てた11月7日付書簡でジッドは次のように述べている——「マシスが『ラ・ルヴュ・ユニヴェルセル』で大攻撃を再開しました。今春の攻撃は序章にすぎませんでした」（*Correspondance André GIDE - Dorothy BUSSY, I. Juin 1918 - Décembre 1924*. Édition établie et présentée par Jean LAMBERT, Paris : Gallimard, «Cahiers André Gide» 9, 1979, p. 443）。ちなみに「今春の攻撃」とはマシスの論文「ジャック・リヴィエール氏の場合」のこと（Henri MASSIS, «Le cas de M. Jacques Rivière», *La Revue universelle*, 1<sup>er</sup> mai 1923, pp. 375-387 ; repris sous le titre «André Gide et son témoin» in *Jugements II*, pp. 79-107 et *André Gide*, pp. 131-156）。
  - 10) Henri MASSIS, «André Gide et Dostoïevsky», *La Revue universelle*, 1<sup>er</sup> novembre 1923, pp. 329-330 ; repris in *Jugements II*, pp. 23-24 et *André Gide*, pp. 82-83. ちなみに引用の第1段落は単行書収載のさいに改稿されている。ここでは後者に依って訳出した。
  - 11) *Ibid.*, p. 338 ; repris in *Jugements II*, p. 52, et *André Gide*, p. 106.
  - 12) Voir André GIDE - Roger MARTIN DU GARD, *Correspondance 1913-1951*. Introduction par Jean DELAY, Paris : Gallimard, 1968, t. I, p. 236 (lettre de RMG du 11 janvier) ; *Deutsche-französische Gespräche 1920-1950. La Correspondance de Ernst Robert Curtius avec André Gide, Charles Du Bos et Valéry Larbaud*, Francfort-sur-Main : Vittorio Klostermann, 1980, p. 72 (lettre de Gide du 15 janvier et celle de Curtius du 20 janvier).
  - 13) 約3,500点にのぼるジッド旧蔵の切り抜きコレクションのなかで、ジッド＝マシス関係の論文・書評は計36点、このうち『ドストエフスキー』に関わるものは、本文に記したように、マシス自身の論評も含めて16点（1923-24年）である。現在ではそのいずれもがイギリス・シェフィールド大学のインターネットサイト「ジディアナ Gidiana」で参照可能（ただし切り抜きのスキャン画像ではなく、電子テキスト化されたものも混じる）。
  - 14) 同様の書き直しの例としては、筆者が初めて活字化した『放蕩息子の帰宅』の評価

- をめぐる2通のフランシス・ジャム宛書簡を参照されたい—— André GIDE, *Le Retour de l'Enfant prodigue*. Édition ciritique établie et présentée par Akio YOSHII, Fukuoka : Presses Universitaires du Kyushu, 1992, pp. 57-61.
- 15) Lettre à Massis, reproduite in André GIDE, *Œuvres complètes*, t. XII, Paris : Éd. de la NRF, 1937, pp. 553-555 (voir aussi son *Journal II, 1926-1950*. Édition établie, présentée et annotée par Martine SAGAERT, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1997, pp. 591-592 [10 janvier 1938]). 付言すれば、マシスは後年この書簡の一節(「クローデルのなんと見事な言葉を引いておられることか」以下の数行)を自著『人間から神へ』に引用するが、そのさい書簡の執筆年を誤って「1922年」と記している(voir Henri MASSIS, *De l'Homme à Dieu*, Paris : Nouvelles éditions latines, 1949, p. 243)。
- 16) Voir MASSIS, «André Gide et Dostoïevsky», *art. cité*, pp. 339-340 ; repris in *Jugements II, op. cit.*, pp. 65-66. ただしジッド書簡の指摘を考慮したためか、マシスはこの箇所を1948年の『アンドレ・ジッド』でかなり大幅に改稿している(voir MASSIS, *André Gide, op. cit.*, pp. 116)。
- 17) 筆者の承知するかぎり、実際にはジッドがマシスのこの文を銘句として引用することはなかった。
- 18) ジッドのこの指摘を受けたためか、マシスは後年、自著『アンドレ・ジッド』において、《 》内の引用がモーラスの『ロマン主義と革命』序文によることを註記している。Voir MASSIS, *André Gide, op. cit.*, p. 267, n. 200.
- 19) *Correspondance André GIDE - Dorothy BUSSY, I. Juin 1918 - Décembre 1924, op. cit.*, p. 453.
- 20) *André Gide*. Catalogue rédigé par Florence CALLU, Simone GRAVEREAU et Madeleine BARBIN, Paris : Bibliothèque Nationale, 1970, p. 156, item n° 524. ちなみにこのマシス書簡の論点は、まず間違いなく『審判』第2巻の非売版補遺に掲載された「悪は構成せず」(1924年1月執筆。ジッド書簡の冒頭部を引用)のそれと同一のものであった(voir Henri MASSIS, *Jugements. Supplément au tome II*, Paris : Plon, 1929, pp. 3-7 ; repris avec un post-scriptum, in MASSIS, *André Gide, op. cit.*, pp. 124-130)。
- 21) Fragment cité in GIDE - MARTIN DU GARD, *op. cit.*, t. I, p. 237. このジッド書簡(所在は現在にいたるまで未確認)にたいしマルタン・デュ・ガールは2月1日付の返信で次のように応えている——「マシスに回答なさらなかったことを嬉しく思います。あの連中は人に注目されるだけで十分に満足なのであり、かえってそれを利用して、こちらを裏切るような結論や論拠を引き出すようなことを平気でやるのです！できるだけ関係を持たぬこと、これこそが慎重で賢明な方途ではないでしょうか」(*ibid.*, p. 238)。
- 22) Voir François de ROUX, «*Jugements* (tome II), par Henri Massis», *La NRF*, 1<sup>er</sup> avril 1924, pp. 468-474 ; Jacques RIVIÈRE, «Lettre ouverte à Henri Massis sur

- les bons et les mauvais sentiments», *La NRF*, 1<sup>er</sup> octobre 1924, pp. 416-425. ちなみにマシスはリヴィエールの公開状に応ずるかたちで翌年3月、小冊子『ジャック・リヴィエール』(*Jacques Rivière*, Paris : À la Cité des livres, 1925)を上梓する。
- 23) シャルル・デュ・ボスの『アンドレ・ジッドとの対話』(1929年5月刊)に言及しながらマシスが『ラ・ルヴュ・ユニヴェルセル』同年9月15日号および10月15日号に掲載したジッド論のタイトル。
- 24) GIDE, *Journal II, 1926-1950*, *op. cit.*, p. 558 (26 juin 1937).
- 25) Cf. Henri MASSIS, «André Gide et nous» [texte daté du 4 août 1947], in *André Gide*, *op. cit.*, pp. 9-64.
- 26) Claude MARTIN, «État présent des études gidiennes», 『広島大学フランス文学研究』第13号, 1994年10月(マルタンが1993年11月に広島大学でおこなった講演。前掲拙訳『アンドレ・ジッド』に補遺として訳出・収載。引用文はその235頁)。